

# 非漢字系日本語学習者の作文力の伸びの 分析

## 電子メールを利用した日本語作文通信教育 のための基礎的研究

石田敏子

(筑波大学文芸・言語学系)

### 1. 目的

電子メールを利用した日本語の作文通信教育の成果を知るためには、通信教育の対象となっている初級後半から中級にかけての作文力の発達過程やそのレベルの日本語学習者が書く文章の特徴など、作文力そのものを知る必要がある。本研究はこれらの点を明らかにする目的で始められた。

この通信教育は学習者の書いた作文を日本語教師養成課程の学生が添削すると同時にその作文の主題について自らも手紙を書くという形態をとっている。日本語学習者と日本人学生が同一の主題を中心として文を書くわけであるが、両者の文の日本語力以外の質的な差を知るための基礎となる要素を探ることも目的の一部となっている。

ここでは、非漢字系日本語学習者の作文の分析結果について報告する。漢字系学習者については国際シンポジウム「日本語教育と日本研究—日本とアジア地域の華人社会」（1995・11 香港大学）ですでに発表した。必要に応じて漢字系学習者の分析結果も含める。漢字系学習者との比較の目的から分析は同じ手順に従った。

大学における日本語学習者の日本語習得は主として「獲得」よりも「学習」を通してであり、その習得過程を知るにはどう指導されたかとの関連から検討されるべきではないだろうか。この点を考慮して、分析には現在の日本語学習者の中間言語研究で問題となっている事項の他に指導方針と関連した事項を含めた。

### 2. 資料

国際基督教大学（ICU）の集中日本語コースII-III受講者11名（英語母語話者9、ドイツ語1、オランダ語1）の89篇の作文を資料として使用した。『Modern Japanese for University Students』（ICU）のPart Iを終了した段階からPart

IIIを終えるまでの学習者で、日本語能力試験の3級から2級への移行段階に当たる。これらの作文を資料として取り上げたのは、学習者がどのような教材を使用し、どのように教えられたかがよく分かっているからである。

指導の主眼点は特にテンス・アスペクト表現（休みにしたいこと、したこと）、既習読解教材に含まれる語彙・表現の応用、論文調の文体（教科書の既習課との関連主題）の習得においた。

学習者は与えられた主題について一時限中に作文を書き、添削後の作文も宿題として消書し、再提出した。

### 3. 分析方法

文の長さ、構造、接続表現、文末表現、結束性、テンス・アスペクト、受け身や授受表現などを段階的に調べた後、同様の項目毎に同一主題の作文について主として日本人大学生と比較した。数があまり多くないので、統計的検定はしなかった。

## 4. 結果と考察

### 1. 段階的観察

#### 1. 正文と誤文

正文と各文中に含まれる従属節数との関係を表1に示す。ここでの従属節は南不二男（1974）の「従属句」に基づく。個人差も認められるが、正文中50%近くが単文で約35%が二つの従属節を含む文である。漢字系とあまり差はない。段階的に見るとPart IIIに入った頃から正文中の二つの従属節を含む文の割合が単文の割合を上回るようになる。これらの文は重文よりも複文が圧倒的に多く、田丸淑子他（1993）、石田敏子（1991）などの話す力の伸びに関する結果と一致する。

#### 2. 文の長さや構文の複雑さ

主題にもよるが、漸次増減を繰り返しながら、徐々に長く複雑な文を書くようになっていく。平均値を漢字系と比較すると、漢字系の方が同時間内にやや長い作文を書いているが、これはやはり漢字に対する慣れが働いていると思われる。10文節以上の長さの文の割合も漢字系がやや上回っている（表2）。

類似の主題文を10週間後に書いた8名の文の長さや従属節数の変化を調べると（表3）細部については個人差が見られるが、2回目の作文では複雑な長い文を

書いていることが分かる。

### 3. 助詞の誤用

他の助詞を使用する誤選択と助詞の脱落が占める割合はどの段階でもあまり変化は見られないが、不必要な助詞の付加は減少する傾向がある（表4）。

付加される助詞で最も多いのは「の」であるが、漢字系に比べるとかなり少ない。日本語を母語として獲得する場合にも見られる付加で、準体助詞の定着後に起こることから、その影響を受けるとされている（永野賢1959）。最も多く脱落している助詞は「は」で、「の」、「が」、「に」がこれに続く。誤選択で多いのは、「はーが」、「でーに」の混用で、「が→は」>「は→が」、「で→に」>「に→で」となっている。これらは先行研究結果とほぼ一致する。

### 4. 接続表現

田代ひとみ(1995)は文章中における接続助詞類（＝接続的機能を持つ表現。横林・下村1988に基づく。）の使い方を中国語、韓国語、日本語話者別に調べた。その結果によれば、「ーて」を使用した接続がどの群でも最も多く、日本語話者は「ーて」（38.7%）に続いて連用接続を2番目に多く使っているが（27.7%）、中国語話者は「ーて」に集中し（64.5%）、連用接続はわずかしか見られない。その原因として、接続を表す形式なしに文をつないでいくことができる中国語の接続を「ーて」で置き換えているのではないかと述べている。

本研究の非漢字系も全体的には「ーて」を多用し、「が」、「ので」、に続いて「と」及び連用接続を使用している（表5）。しかし、Part IIの終わり頃からPart IIIの始めにかけて、「ーて」よりも連用接続を使用する傾向が現れ、Part IIIに入ってから、主題にもよるが、「ーて」よりも多用される場合が見られるようになる。漢字系も同様である。B群では連用接続は殆ど使用されていないが、3人しかいないことを考慮すると、個人差はあるものの、「ーて」に代わって連用接続を使用しはじめることは習得段階が進んだことを示すとみなしてよいであろう。田代ひとみ(1995)の結果には、母語よりも学習者のレベルが影響を与えているのではないだろうか。

### 5. テンス・アスペクト関係の表現

ここではテンスの他にアスペクト表現として、「ーている」を取り上げて調べた。

テンスに関する誤りは比較的少ない。過去形を使用している文章中に事実や自分の感想を述べる場合に現在形を使用する（教え方の影響か?）、従属節内の誤

用、未来に対する願望を述べる場合に過去を使う（来年も同じだったら良かったと思うー母語の影響か？）、現在のことも普通過去形を使う場合（「一になりました」とすべきところを「一になります」にしてしまうー説明不足か？）などが見られる。

「一ている」の用法は「住んでいる、持っている、知っている、生きている」など、「一ている」の形での入力が多いと思われる表現は殆どまちがえなく使用されている（加藤、福地（1989:42）ではこの用法を特に注意すべきものとして取り上げ、「これらのテイル形は継続とも結果の状態ともとれるが、いずれにせよ一種の状態を表すとみることができよう」としている）。

現在形（過去形）を使用すべき場合に「一ている（一ていた）」を使ってしまふ誤用の方が、「一ている（一ていた）」の代わりに現在形（過去形）を使用する誤りよりはるかに多い（21件:31件）。これは「一ている」の用法の誤類推とも誤りに対する過剰反応とも解釈できる。特に目立つのは「考える、思う」の誤用で、同じ傾向がフランス語話者の話し言葉の誤用にも見られた（石田敏子1991）が、これは一般に教科書などで取り上げていない学習項目であるためと思われる。

これらはテンス・アスペクトについて、読解の際も含めて、もっときめの細かい指導が必要であることを示唆しているといえよう。

## 6. 文末表現

佐々木泰子・川口良（1994）は日本人学生の文末表現の発達過程を調べ、モダリティについて日本語学習者の文末表現と比較している。これによると両者の文末表現の出現率は次のようにまとめられる（分類は益岡隆志1991による）。

文末	日本人大学生	学習者
命題	35.5%	57.4%（小5、6年程度）
みとめ方のモダリティ	8.7	5.1
テンスの	19.7	20.8
説明の	5.2	6.7（中3ー大学生程度）
価値判断の	0.5	0.0
真偽判断の	14.8	7.5（小4、5年程度）
表現系の	1.5	0.9
その他	13.7	1.3

命題：動詞 終止形（現在形）、補助動詞授受（てくれる）、一と思う、一と思う類（気がする・感じる）形容詞 終止形（現在形）、一だ・である（ナ形、名+だ）、（さ）せる、（ら）れる

みとめ方：否定形

テンス:動詞 テンス・アス<sup>ハ</sup>外、形容詞 過去形（一た）、一だ・である過去形（一た）、させる・られる テンス・アス<sup>ハ</sup>外、一ない 過去形（一なかった）、一のだ過去形（一のだった）

説明:のだ・わけだ

価値判断:べきだ、なければならない、てもよい

真偽判断:かもしれない、に違いない、はずだ、ようだ、らしい、そう、だろう、のだろう、ないだろう、疑問形

表現系:たい、う・よう、まい、つもり、終助詞

その他:体言止め、倒置法、その他

（分類の詳細は佐々木との私信による。）

日本人学生の場合には命題で終わる文は高学年になるにつれて減少するが、説明、真偽判断のモダリティは増加する。一方日本語学習者は命題と説明のモダリティで終わる文を多用し、真偽判断のモダリティはあまり使用していない。推量表現については日本人大学生は「と思う」>「だろう」>疑問型>「はずだ・ようだ・らしい・そうだ」>「かもしれない・に違いない」と高学年になるに従って主観性の強い表現から客観性を帯びた表現を使用するようになり、日本語学習者についても同様の傾向がうかがわれるとしている。日本語学習者は「一と思う」をかなり多用しており、中2・3年程度の使用率となっている。

本研究の資料もこの研究の分類に従って分析したが、佐々木らの調査対象は漢字系が非漢字系の2倍以上のため、今回の結果を直接比較することは出来ない。「一と思う」、「一と思う」類は「命題」中に分類されているが、本研究ではやや特異な傾向を示すので、別に取り扱った。その結果は次のようになった。

文末表現	非漢字系
命題	33.5%
みとめ方のモダリティ	6.8
テンスの //	39.0
説明の //	1.4
価値判断の //	1.6
真偽判断の //	5.9
表現系の //	4.2
「一と思う」、「一と思う」類	5.7
その他	1.9

主題の差が影響していると思われるが、命題で終わる文が日本人大学生と同じ程度である反面、説明のモダリティが少なく、表現系のモダリティが多い。これらの数字は佐々木・川口の研究結果に従うと、小学低学年と同じ程度である。

類似主題の作文の文末を比較してみると（表6）、10週間の期間ではあるが、命題で終わる文が半減し、僅かながら他の文末表現が増え、多様な表現方法を習得しつつあることがうかがえる。また、「と思う」を多用する傾向が見られる。第1回目の「その他」に分類されているのは体言止めの文で、文末をきちんと終えられなかったものと考えられる。

## 7. 回避表現

日本語学習者の中間言語にみられる回避表現として、ここでは受け身・使役表現と「一てあげる（もらう、くれる）」を取り上げて観察した。

### (1) 受け身・使役表現

受け身表現の段階毎の使用状況（A群）を正・誤用別に示すと下のようになる。数字は件数を表す。

作文	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
正用	0	0	1	1	1	5	6	6	1	1
誤用	1	0	0	0	0	3	1	3	1	0

主題の影響もあるが、6回目の作文から使用が増える傾向が見られる。B群でもかなり早い段階から極わずかに使われてはいるが、正用が増えるてくるのは7回目頃からである。使役表現はA、B群ともほとんど使っていない。全体を通じて正・誤用ともに4例である。

### (2) 「一てあげる（もらう、くれる）」

これもほとんど使われていない。全体で「一てあげる」が7、「一てもらう、一てくれる」が各3例で、これらは正しく使われている。主題の関係もあるが、使用法の習得が遅れる傾向は否定できない。

## 8. 文体

A群では1-4回目の作文までは全員「デス・マス」体で書いているが、5回目には「デス・マス」が混在する作文が2篇現れる。以後「ダ・リアル」体がじょじょに増す傾向が見られる。一方、B群では1-5回目まで「デス・マス」体

で全員が書いているが6回目以降は8回目をのぞいて殆ど全員がダ・テアル体を使用している(表7)。

読解教材で「ダ・テアル」体の文章を学ぶのは、いずれの群でも2回目の作文の前であるが、実際に使用し始めるのはかなり遅れている。文体の選択は学生にまかせていたので、何を基準にしてダ・テアル体を選んでいるかは定かではない。

## 9. 学習した表現の使用状況

既習表現は積極的に使用している。しかし、理解はできても使用するには至っていないらしく、何を言いたいのかは判断できるが、不自然さや誤用が残る段階にある。最初の段階で基本的な構文を習得しきれていない学習者は、表現や語彙は豊富になるものの、最後まで不明確な文を書く。初級レベルでの構文習得の重要性を示す現象であろう。この種の学習者は漢字系には見られなかった。漢字学習のための時間やエネルギーを構文習得に使用できる有利さも影響しているであろう。

## 11. 非漢字系の作文の特徴——日本人大学生・漢字系との比較

同一主題(「私の町」)で書いた非漢字系学習者の作文と日本人大学生(筑波大学一年生)の作文各10篇とを同項目について分析し、非漢字系の作文の特徴を知るために比較した。約3か月目に書かれた作文である。漢字系の同じ主題の作文は5篇しかないため、特に参考になる場合のみ比較した。日本人大学生の作文も非漢字系と同様、75分間に教室内で書かれたものである。

### 1. 文の長さや複雑さ(表8)

日本人大学生は日本語学習者より長く、複雑な文を数少なく書いている。漢字・非漢字系間にはあまり差は見られない。漢字系より非漢字系の方が一作文中の平均文数が少ないのはやはり漢字を書く速度が関係していると思われる。

### 2. 接続表現の比較(表9)

表5と比較すると「一て」の使用が減り、連用接続を使う傾向が出始めている。日本人大学生とは「と」の使用に関して差が出ている。大学生は「が」を多用して長い文を書いているが、前文を認め、意見、感想などを加える用法がもっとも多く、40%をこえている。逆接の用法は30%弱で、前置き文(句)の導入や対比がそれに続く。非漢字系の「と」は誤文の多い作文中で多用されており、漢字系は「一て」に続いて「と」を多用しているところから、英語の「and」の干渉の可能

性は極めて高い。特に日本語の名詞を繋ぐ「と」が「and」と同じ機能を持つこともこの誤用に強く影響していると考えられる。干渉に誤類推の重なった現象と言えよう。

### 3. 文末表現の比較

命題で終わる文は漢字系、非漢字系、日本人大学生と少なくなっているが、他の文末表現を比較すると非漢字系は漢字系より変化に乏しい。

同主題の作文ではあるが、日本人大学生は自分の町を紹介する形をとるものが多いのに反し、学習者は漢字・非漢字系を問わず自分の町に対する意見を述べている。特に漢字系の表現形式にこの傾向が強く、これが文末表現の差に出ているのではないだろうか。テンス・アスペクトのモダリティが少なく、真偽判定、価値判断のモダリティが漢字系に多いことからこの点が推察される。

佐々木・川口(1994:10)では「「ーと思う」の使用は中1がピークで、大学生になると多様な真偽判断のモダリティを使用するようになる」とあるが、本研究の資料では、大学生が「と思う」を多用し、むしろ漢字系の方が真偽判断のモダリティを多く選択している。また、「(日本語学習者が)命題と説明のモダリティで文を終止する比率がかなり大きく、逆に真偽判断のモダリティの比率が小さい(佐々木・川口1994:1)」という傾向も見られない。主題によって文末表現の選択は異なり、一概には言えないのではないだろうか。

日本人大学生が自分の意見を述べるのが不得手な傾向は電子メール交換にも表れ、英国の学生からは作文の主題についての意見をもっと盛り込んだ手紙を書いてほしいとの要望が寄せられている。

この文末表現については分類方法の検討及び主題や学生、学習者を変化させた検証をもっと行う必要がある。

### 4. 受け身・使役表現

受け身形は日本人大学生が42件使用しているのに対して非漢字系は10件にとどまっている。大学生が使用しているのは主として「言われる、呼ばれる、行われる、恵まれる、知られる」など属性叙述及び降格受動文(益岡隆志1987)で、第3者として、町を叙述する方法として、受け身形を多用している。非漢字系はある出来事から主体が影響を受ける受け身やめいわくの受け身の他には「ーに恵まれている(既習)」を使っているだけで、この種の受け身表現を使うには至っていない。



## 5. 結束性

最初の段階の作文と後半の作文との自然さ、不自然さに関する大きな差は結束性に表れるのではないだろうか。文内の結束性は複文の増加で見てとれる。また、文間の接続は接続詞等、接続のための語彙が豊富になることが影響を与えている。ここでは文間の接続を日本人大学生と比較する(表11)。

森田良行(1987)は文間の意味関係を保つものとして次のような指標や条件句、接続語句による接続をあげている( ( )内は筆者の作例)。

対義の語によって受け継がれる接続	(夜は和食ですます。朝は洋食にする。)
類義の語や同類の主題	〃 (ワインがいい。ビールはあわない。)
上・下位語	〃 (これは鱈だろうか。とにかく魚だ。)
同一語の反復	〃 (梨が好きだ。日本の梨はおいしい。)
言い換え	〃 (ケーキはやめよう。甘い物は肥る。)
文脈指示語	〃 (トリュフを洗う。それを二つに切る。)
応答詞	〃 (酒は体にいい。いや、それどころか、百薬の長である。)
副詞	〃 (あの店はおいしい。もちろん高い。)
接続詞	〃 (この山椒は小粒だ。けれども辛い。)
接続語句	〃 (そう言ったとしても、どうしてもそうしたかったら等による接続)

今回の資料を上記の接続方法にゼロ指標を加えて示したのが表11である。ゼロ指標の文は前文との有縁性(A・ベケシュ1987)が極めて弱く、これの比率の高さが非漢字系の初期の段階の作文に不自然さを与えていると思われる。日本人大学生は話題を変えるためにこの方法を使用している。

非漢字系も日本人大学生も同一語の反復による接続が最も多い点は一致しているが、大学生が副詞、接続詞を多用しているのに反して、非漢字系は文脈指示語を多く使っている。これは語彙力の差に起因すると思われる。非漢字系ではソ系の指示語が多く現れるが、大学生はコ系を多用している。この傾向は漢字系にも見られる。ア系の使用が一例あるが、これは誤用である。ア系は新聞などでの使用率も低く(国立国語研究所1970)、正しい使用方法を知る機会が限られている。

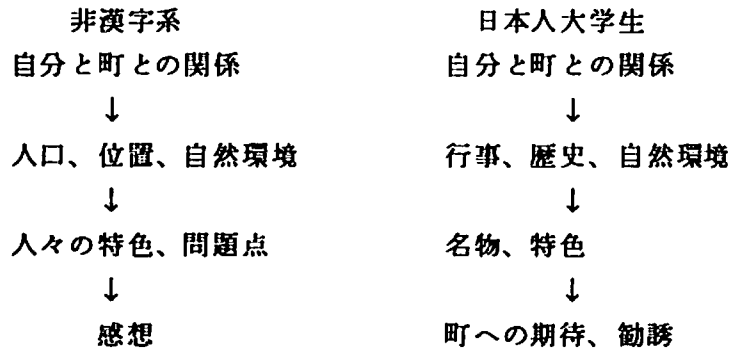
文間の結束性が学習レベルや主題との関連でどう変化するかも今後調べる必要がある。ベケシュ(1987)が示唆しているように、学習段階を示す指標の一つとして使える可能性が見込まれるからである。

## 6. 作文の構成

言語や文化により文章構造は異なると言われている（Kaplan, R. B. 1966他）が、今回の作文に取り上げられている事項のうち特に差が見られるものをあげると次のようになる。

	非漢字系	大学生
名所、名物、行事等	1例	8例
人々の特徴	4	1
人口	4	1
問題点	6	2

個人差もあるが、構成にはグループ毎の類似がみられる。



非漢字系はアメリカ人が多いので、日米の町の郷土色の有無の差が内容にも反映しているが、日本人大学生が町の文化的側面を紹介し、町と自分とが一体化するような書き方をするのに対し、非漢字系は町の人々の方に興味をよせ、自分と町とを相対する位置において述べているという印象を受ける。問題点に触れていない4人のうち、2人は描写力の制限から話題がそこまで掘げられなかったとも言える。漢字系は香港の中国返還に触れた例が多い。取り上げた主題が内容にも強く影響しているが、日常の関心事と同時に思考傾向も当然表れていると思う。

本研究着手の動機となっている電子メール交換では、双方の学生が同一主題を巡って意見を述べるので、ここで取り上げたような内容の差を知ること今後の課題となる。

## 5. まとめ

今回の資料に関しては、このレベルの学習者の日本語を書く力の発達過程、特

徴及び指導上の留意点としては次のことが言える。

1. 徐々に長く複雑な文を書くようになるが、従属節が二つ程度以上の正確な文はまだ望めない。
2. 「は」、「が」及び場所の「に」、「で」の間に混用が見られる。不必要な助詞の付加は段階的に減少する傾向がある。
3. 文や節、句の接続に「と」を多用する。これは母語の干渉と思われる。連用形による接続は後半になって現れる。この他の母語の影響はプラスの意味でもマイナスの意味でも漢字系ほどは顕著ではない。
4. 連用形による接続は後半になって現れる。これは進歩を示す指標となり得る。
5. 「ーている」を過剰に使用する傾向がある。
6. 文末表現も多様化するが、その発達過程は主題との関連でさらに調べる必要がある。
7. 既習事項は積極的に使用されている。誤用は減少せず、文章全体としては何とか理解はできるが、まだ、不自然さが残る段階にある。
8. 既習のタイプの受け身表現は後半以後正しく使えるようになる。受け身表現の多様な使用方法について文脈の助けを借りて指導をする必要がある。
9. 授受表現、使役表現はまだ回避される傾向が強い。
10. 指示詞のア系列の用法について、コ、ソ系との関連で指導する必要がある。
11. 文間の結束性の強まりの伸びについて、文章の自然さとの関連でさらに調べなければならない。
12. 種々の進歩はPart IIIに入った段階で見られ、Part IIとの間の休暇が教育的に役立っていることを示唆している。

以上のように初級後半から中級レベルでの書く力の実態の他に、指導上の盲点とでも言える事項が明らかになった。これらの結果を電子メールによる作文の通信教育にどう生かすかが今後の課題である。

文末表現の分類に関して佐々木泰子さんの助言を得た。深く感謝の意を表したい。

#### 参考文献

1. 石田敏子(1986)「英語・中国語・韓国語別日本語学力の分析」『日本語教育』58:162-194

2. ــــــــ (1991) 「フランス語話者の日本語習得過程」『日本語教育』75:64-77
3. 加藤泰彦、福地務(1989)『テンス・アスペクト・ムード』荒竹出版
4. 国立国語研究所(1970)『電子計算機による新聞の語彙調査』秀英出版
5. 佐々木泰子・川口良(1994)「日本人小学生・中学生・高校生・大学生と日本語学習者の作文における文末表現の発達過程に関する一考察」『日本語教育』84:1-13
6. 田代ひとみ(1995)「中上級日本語学習者の文章表現の問題点ー不自然さ・わかりにくさの原因をさぐるー」『同上』85:25-37
7. 田丸淑子、吉岡薫、木村静子(1993)「学習者の発話に見られる文構造の長期的観察」『同上』81:43-54
8. 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
9. 永野賢(1959)「幼児の言語発達についてー主として助詞の習得過程を中心にー」国立国語研究所論集1『ことばの研究』383-396
10. アンドレイ・ベケシュ(1987)『テキストとシンタクス』くろしお出版
11. 益岡隆志(1987)『命題の文法』くろしお出版
12. ــــــــ (1991)『モダリティの文法』くろしお出版
13. 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
14. ــــــــ (1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
15. 森田良行(1987)「文の接続と接続語」『日本語学』Vol.6 No.9 明治書院28-36
16. 横林宙世・下村彰子(1988)『接続の表現』荒竹出版
17. Kaplan, R.B. (1966) 'Cultural thought patterns in inter-cultural education'. *Language Learning*. 16:1-20

表1 正文中の従属節数

学習者/節数	1	2	3	4	5	6	7	8
A群 A	57.1%	23.8%	19.0%	0%	0%	0%	0%	0%
B	60.0	13.3	20.0	6.7	0	0	0	0
C	21.4	35.7	16.7	11.9	9.5	4.8	0	0
D	55.6	41.7	2.8	0	0	0	0	0
E	43.8	46.9	3.1	3.1	0	3.1	0	0
F	53.7	41.5	4.9	0	0	0	0	0
G	29.4	43.1	23.5	3.9	0	0	0	0
H	59.1	31.8	9.1	0	0	0	0	0
B群 I	35.4	39.6	19.8	5.2	0	0	0	0
J	50.8	34.4	11.5	1.6	0	1.6	0	0
K	68.6	25.7	0	0	0	0	2.9	2.9

%=従属節数/総節数

表2 文数・文の長さ（左：非漢字系 右：漢字系）

作文	文数	最長文節数	長文節数 (%)	従属節数
A群 1	17 23	10 11	5.6 10.5%	1.8 1.8
2	10 10	12 13	26.5 22.2	2.4 1.9
3	14 22	13 22	34.7 22.7	2.5 2.1
4	15 16	14 16	19.1 31.8	2.1 2.4
5	18 19	14 14	22.5 25.5	2.2 2.2
6	14 15	15 17	35.0 24.6	2.0 2.3
7	13 17	15 18	37.4 25.5	2.3 2.1
8	16 15	18 18	38.8 40.3	2.5 2.2
9	14 17	17 21	39.4 31.0	2.5 2.6
10	12 14	20 18	49.1 70.2	3.3 3.1

B群 1	10 13	12 15	7.7	24.8%	1.8	2.3
2	14 16	13 12	16.1	13.1	1.8	2.0
3	20 14	16 13	13.5	23.6	2.0	2.1
4	18 15	15 19	19.8	34.1	2.1	2.5
5	13 19	15 17	30.8	21.0	2.3	1.9
6	18 13	11 21	5.0	34.7	1.9	2.8
7	15 23	12 14	33.3	14.2	2.4	1.7
8	18 20	18 14	13.7	24.4	2.2	2.3
9	27 26	12 13	21.1	19.4	2.0	1.9
1 0	18 13	20 17	25.3	50.0	2.7	2.4
1 1	16 16	18 19	27.6	45.0	2.4	2.9
1 2	19 14	15 24	26.5	52.7	2.0	2.7
1 3	19 15	19 20	30.0	62.0	2.6	3.5

数字は作文毎の平均、長文節=10文節以上の文、%=長文節数/文数

表3 類似主題文（10週間後）の比較（左=1回目、右=2回目）

A. 文の長さ

最長文節数	11	13
10文節以上の文数（%）	1 (6.7)	5 (30.0)
1文中の従属節数	1.8	2.1

B. 従属節数の伸び

1文中の従属節数

1	45.4%	34.0%
2	33.8	38.8
3	17.7	14.3
4	1.5	9.5
5	0.8	2.7
6	0	0.7
7	0.8	0

%=従属節数/文数

表4 助詞の誤用（A群のみ）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
付加	14.6	5.7	14.6	13.0	13.8	10.7	6.0	8.8	7.1	5.3
脱落	33.3	60.0	39.0	23.9	47.7	39.3	36.0	47.1	47.1	44.7
誤選択	52.1	34.3	46.3	63.0	38.5	50.0	58.0	44.1	45.7	50.0

数字は総誤用に対する%

表5 接続助詞類（上位5種類）

接続助詞類	%
「ーて」	40.7
が	19.2
ので	14.9
と	13.1
連用形	12.0

%=総接続助詞類に対する割合

表6 類似主題作文の文末表現

モダリティ	1回目の作文	2回目の作文
命題	10.0%	5.8%
みとめ方	3.5	6.5
テンス	76.8	76.3
説明	0	1.4
価値判断	0.7	1.4
真偽判定	2.1	1.4
表現系	2.1	1.4
「と思う」類	2.1	5.8
その他	2.8	0

表7 文体

A群

文体/作文	1-4	5	6	7	8	9	10
デス・マス	100%	42.9%	71.4%	62.5%	33.3%	71.4%	50.0%
ダ・デア	0	28.6%	28.6%	37.5%	66.7%	28.6%	50.0%
混在	0	28.6	0	0	0	0	0

表8 文の長さや複雑さ

非漢字系・日本人大学生・(漢字系)の比較(同一主題文)

	非漢字系	日本人大学生	(漢字系)
文数	17	9	21
文節数/文	9	15	7
従属節数/文	2	4	2

数字は学習者・学生の平均

表9 同一主題文中の接続助詞類の使用 (上位6種)

接続助詞類	非漢字系学習者	日本人大学生
「一て」	21.1%	14.4%
連用形	15.3	26.7
と	12.9	7.0
ので	8.2	6.4
が	8.2	14.4
「一から」(理由)	7.1	1.0

数字は学習者・学生の平均。%=助詞類/助詞類総数



表10 同一主題の作文の文末表現  
非漢字系・日本人大学生・（漢字系）の比較

モダリティ	非漢字系	日本人大学生	（漢字系）
命題	47.3%	41.9%	52.6%
みとめ方	4.1	7.8	3.1
テンス	38.5	29.5	16.5
説明	1.2	1.6	2.1
価値判断	1.2	0.8	4.1
真偽判定	1.8	3.1	12.4
表現系	0.6	2.3	3.1
「と思う」類	4.7	11.6	4.1
その他	0.6	1.6	2.1

表11 文間の結束を示す指標の比較（同一主題の文）

	非漢字系	日本人大学生
対義語	5.7%	1.4%
類義語・主題	7.0	8.3
上・下位語	7.6	4.2
語の反復	27.4	36.8
言い換え	3.8	6.9
文脈指示語	21.7	4.9
応答詞	0	0
副詞	8.9	20.1
接続詞	8.3	10.4
接続句	1.3	2.1
0	8.3	4.9

%=総指標数に対する割合